

仏訳小説『巴里夫人 マダムアイダ』 Ⅱ 遅く生きてパリに死んだ日本夫人Ⅱ

芹沢光治良の作品で三番目に仏訳出版された長編小説は『巴里夫人』です。昭和26年に『巴里に死す』、昭和30年に『一つの世界―サムライの末裔』が仏訳されてロベール・ラフォン社から出版されました。次の仏訳小説として芹沢光治良が選んだのは『巴里夫人』でした。フランスの大使館員の小野芳郎が仏訳し、作家で友人のアルマン・ピエラルによって監修されて、ロベール・ラフォン社から昭和33(1958)年10月6日に出版されたのです。仏訳の題は『MADAME AÏDA』と題して『芹沢光治良作品集』の第五巻の「月報」に「主人公の名を題名にするフランスの習慣に従って、出版社の方で改題したのですが、女の一生というように、フランスでは読まれたようです。」と書かれています。また『巴里夫人』はその昭和二十六年のパリに滞在中に親しんだ浅田夫人との約束で、創作したものです。「とあるように、モデルになった女性がいて、「小説の主人公にしたいような生活をパリで送っている日本婦人でした。自分が死んだら小説に書いてくれと言って、しばしば身上話を私にしたが、自ら話を創っているのかと、最初は疑ったものです。」とも書いています。そして、「彼女がパリで死んだと知って、約束を果たすために小説を書くことにしたが、婚家に残した娘を偲んで、いつもその幸福を祈りながら涙をこぼした彼女を思っ、その婚家をわざと船場にしないで、名古屋にかえたのです。」と舞台を変え、氏名も仮名のアイダ夫人にしたのです。この月報には「宇野千代さんが発行していた雑誌『スタイル』に一年間連載したと書いていますが、雑誌『スタイル』に連載したのは『麓の景色』で、雑誌『婦人画報』に昭和30年1月から12月に『女の海』又は『巴里夫人 The Japanese a Paris』と題して連載したのです。内容は「序章 パリの淫売宿で 第一章 風にふるる若さ 第二章 親も結局他人でしょうか 第三章 わが立つ大地のゆるる日 第四章 悲しい結婚 第五章 私も日本女性でした 第六章 離婚とは追いだされることです 第七章 やつと解放されて 第八章 ばりよ、こんにちは 第九章 スパイになれという 第十章 フランス敗れたり 第十一章 さようなら」です。連載が終わる前の11月20日光文社(カッパブックス・新書版)発行の単行本は『巴里夫人』の題にな

りました。昭和34年4月22日講談社発行の現代長篇小説全集24『芹沢光治良集』にも『巴里夫人』と題して収録されました。実は、短編小説『女の海』が書かれ、昭和13年10月号の雑誌『オール讀物』に発表されていたのです。この作品は、昭和14年10月20日金星堂発行の『祈りのこころ』に、昭和23年5月5日高島屋出版部発行の『抒情』にも収録されました。この「あどがき」に「太平洋戦争直前にドイツ人によって翻譯された」と書かれています。あるいは、この短編小説の題が「女の海」であったことを思い出して、長編小説の題『女の海』を引っ込めたとも思われます。

この長編小説『巴里夫人』の主人公は、戦後の昭和26(1951)年の4月からスイスのローザンヌで開催された世界ペン大会に日本ペンクラブの代表として参加し、ロンドンからパリの空港に着いたとき、オクタニ君と迎えてくれた「ふしぎな日本婦人」のアイダ夫人でした。「パリの街なかで靴下もはかずに革サンダルという不謹慎な軽装で」したが、ホテルに案内し世話をしてくれました。「いったいその活動的な日本婦人は誰であろうか、オクタニ君とどんな関係があるのかと、何をする人で、ぼくは好奇心をそそられた。」というような出会いでした。オクタニ君から「マダム・アイダ」と紹介され、夫人がやっている日本料理店に案内されました。「この辺の暗いホテルは淫売宿である」と思い、不潔な店を不快に感じますが、皆に交じって食事をしました。アイダ夫人が「日本婦人に珍しく知識人だということも」知ります。オクタニ君は戦前に給費生として三年間留学した時には、アイダ夫人は日本大使館の武官室に勤めていて、戦中もパリに苦難に耐えて滞在していたのです。戦後にオクタニ君が再度留学してアイダ夫人に再会し、日本食を御馳走して、留学生達のための「日本料理店」をやることになったのです。ぼく芹沢氏は、「一食百五十フランの日本食もありがたいが、それよりも、ここに集まる日本人に興味があった」のです。序章に「一九五一年の暮に、アイダ夫人が急死」し、火葬など最後の面倒をみたセキグチ画伯からの手紙で「ここに、もう一人、巴里に死すが出ました」と知らされます。「ぼくは、もう一つ、『巴里に死す』を書かねばならないことを、さとった。それが死者との約束であった。」と書いています。パリ滞在中に、柔道のカワイシさんの依頼で「文学と柔道」というフランス語の短いスピーチをした時に、アイダ夫人がひよつくり表れ、その

夜の帰りに話し、「私はパリで死ぬつもりですわ」と聞きます。食堂が不潔で、食事には行かなくなっていたのですが、そこに集まる人々とおしゃべりをするために、土曜日の夜にアイダ夫人の店を訪ね、留守番を頼まれます。アイダ夫人は男と逢引きをして帰って来て、テーブルに顔を伏せてむせびあげ、お帰りになる前に「私の一生」の告白を聞いて、作品に書いて欲しいと頼みました。アイダ夫人が物語ったことを第一章から第十一章に創作したのが『巴里夫人』です。

新潮社版『芹澤光治良作品集』月報「思い出すこと」の「二パリで死んだ二人の女主人公」に、「この巻(第五巻)には、『巴里夫人』と『巴里に死す』とを収録しました。主人公が双方とも作者の愛する町、ペギーのいわゆる『全き慈愛の町、このはかない雨を通して、最も独特に、最も技巧的に真実の祈りの立ち上る町』パリで死ぬので、一卷におさめるのが最も適切だと思えます。『巴里夫人』はその昭和二十六年のパリに滞在中に親しんだ浅田夫人との約束で、創作したものです。」と書いています。浅田夫人は大阪の船場の御寮人として知られた婦人でした。旧家(政商)の中川家の長女路子として不自由なく育ち、東京女子大に合格して上京し東中野の家に老婢おまつの世話を受けながら学びました。デモクラシーの風潮の中、東大のカワイイ教授に経済原論を聴き、女性解放史を研究したりもします。同級生市河春子の兄の画家市河夫妻にデッサンや油絵を学びます。しかし、二年生の秋に、母の娘ではなく、野間夫妻から紹介された横浜の鈴木さんが生母であることを知ります。父が芸者小菊に生ませた子で、母の願いで中川家の娘として引きとられたのです。結婚はせずに一生独身で暮らそうと、洋画を学ぶために洋行しようとしてます。ぼく芹沢氏は、アイダ夫人の告白を聞きながら、M子のことを回想します。

アイダ夫人が尊敬していた有島武郎が愛人と情死し、関東大震災に遭遇します。知らずに見合いさせられた松田さんが、震災の中に路子を心配して訪ねてくれます。震災後に名古屋に帰り、松田さんと結婚することになりました。「幸福そうに見えて悲しい結婚」でした。しかし、娘正子が生まれ、子育てで幸福を感じました。ところが、「あの人」は芸者あそびをし、性病をうつされます。芸者の小花をかこい、嫌悪すると、路子も芸者の子だと言われ、離婚を考えます。路子は家族制度に耐えられなくなり、正子

を松田家に残して実家に帰ります。仲田さんに離婚のとりなしを頼み、上京します。離婚が成立し、中川家からも離縁され、祖母の実家の「アイダ」の姓を称し、一人パリに移住します。船中で野村中佐と出会い、パリでは油絵を学びます。やっと自立して生きる喜びを感じたのです。

ぼく芹沢氏は、『巴里に死す』が仏訳出版されることになり、アイダ夫人の告白を聞くのを避けようとしています。しかし、アイダ夫人はお話を全部聞いてもらい、作品に書いてもらいたいと語り続けます。戦争が厳しくなり、野村大佐の車ですばらしいアパルトマンに引越し、夢のように幸せな同棲関係の日々を過ごします。ドイツのナチ軍がパリに進軍して来て、野村大佐は秘密な任務でスイスに出掛け、姿を消しました。路子はアパルトマンから追い出され、マダム・マルケの家に寄寓し、アンナン人となって解放後のパリで生き抜いたのです。向かいのビルの建築家との関係が出来て、結婚してオルレアン城門の家に移ったと最後に書いて欲しいと泣きながら語りました。芹沢光治良は、アイダ夫人の告白を最期まで聞いて、『巴里夫人』を創作しましたが、戦中の街娼婦としての悲惨な生活は隠されていることが、アイダ夫人の悲劇を暗示していると思われまます。アイダ夫人は、日本の封建的な家族制度と悲壮に格闘して、女一人で生き抜き、異郷のパリで死んだ女性と言えます。

芹沢光治良は、このフランス滞在を長編小説『新しいパリ』(昭和28年2月1日 小説朝日社発行)にも書いています。この「21〜26」は、短編小説『パリの日本料理店』として書かれたのですが、アイダ夫人を「神戸の有名な女学校を出て、アメリカの大学を卒業し、大阪の古い大商家のご新造(大阪の有名な薬問屋の女主人)であつたが、娘二人を育てあげると離婚して、パリに来たといふ噂であつた」と書き、「日本の家族制度は女を不幸にしてゐるんですよ」「餓死することも、乞食をすることもできないから、アンナンの女は夜街角に立ちました」「あの不幸にひからびたやうなマダムが、秘密に愛人を持つてゐたとはいえずがにパリだと驚きました」とも書いています。

長編小説『巴里夫人』は、芹沢文学ではモデルのある作品として特異な作品と言えますが、最初の長編小説『明日を逐うて』を受け継ぐもので、『巴里に死す』とは対になる作品です。もつと愛読されて評価されなければならぬと思います。

原爆小説『一つの世界—サムライの末裔』 肌の色を超えて一つの世界へ

芹沢光治良は、昭和26年に長編小説『巴里に死す』が仏訳されてロベール・ラフォン社から出版されることになり、第二の仏訳作品として創作したのが『一つの世界—又はサムライの末裔』です。昭和27年10月から翌年の10月まで、雑誌『婦人公論』に連載されました。太平洋戦争でアメリカが原子爆弾を製造しました。都市空襲で壊滅的な被害を受けて敗戦は決定していたのに、トルーマン大統領が命じて8月6日に広島に、9日には長崎に原爆が投下されました。原子爆弾の威力を広島・長崎に投下すること、人体実験をしたとも言えます。芹沢光治良は、その惨状を書いて世界に知らせねばならないと、何度も取材して真剣に創作したのが『一つの世界』であったのです。連載と同時に青木和子夫人によって仏訳されて、ロベール・ラフォン社から出版されたのです。原爆小説の先駆と言えます。

初刊本は昭和29(1954)年4月25日に中央公論社から出版されましたが、題は連載と同じ『一つの世界—又はサムライの末裔』でした。昭和32年5月20日宝文館発行の『芹沢光治良自選作品集4 一つの世界 サムライの末裔』の「あとがき」には、「角川小説新書では、青木さんのフランス文によって、『サムライの末裔』を出版したが、この選集には、もとのままを採用した。」と書かれています。ですから、一種の本文が刊行されていたのです。

仏訳が1955(昭和30)年5月20日『6月1日』にロベール・ラフォン社から出版されましたが、フランス的な題として、副題により『LA FIN DU SAMOURAI』と題されました。この仏訳に合わせて同年の8月20日に角川小説新書として『サムライの末裔』と題されて刊行されました。この本文を少し改稿をして、昭和49(1974)年7月15日に新潮社から発行された『芹沢光治良作品集 第四巻』にも、『サムライの末裔』の題で収録されました。しかし、この『サムライの末裔』を没後の平成8(1996)年8月10日に新潮社から発行された『芹沢光治良文学館 6』に収録された時には『一つの世界—サムライの末裔』と改題されました。これは、どの様な経過でなされたか不明ですが、私はこの題が一番相応しいと思っています。「サムライ」とは

「武士軍人」のことで、その末裔は阿部家の人々ですが、今回精読して阿部太郎が夢想する「人類が色から解放されることで世界が一つになる」からの「一つの世界」の方がこの長編小説の題に適していると確信したからです。GRACE SUZUKI 訳の英訳は、部分訳のようですが『ONE WORLD』と題されています。この翻訳が完訳され、単行本『ONE WORLD』としてアメリカの出版社から発行されることを念願しています。

芹沢光治良は角川小説新書『サムライの末裔』の「あとがき」に、「これはフランスで発表することを念頭において、初めて私の書いた長篇小説である。」「私もフランスの友人に読んでもらう小説を書こうと、決心がついて『一つの世界』に筆をそめることにした」と書かれています。『巴里に死す』の仏訳が出版され、それに続けて仏訳されたのが『LA FIN DU SAMOURAI』『サムライの末裔』です。フランスでは、「現代の黙示録」「原爆が人間の精神をも破壊することを、世界はこのすばらしい小説ではじめてしられた(ピカドンは人間の魂をも破壊する)」「現代の叙事詩ともいえるべきすばらしい小説」「日本の世界に向つての抗議と悲願に驚嘆した」と激賞されたこと。また、芹沢光治良は自選作品集『第四巻』の「あとがき」に、「この作品のフランスでの成功で、私にはこれからフランスで小説を発表する機会と自信が与えられた。」「この小説はまた、ポロランド訳も出た。近くイギリス訳も出る筈である。」と記しています。新潮社版『芹沢光治良作品集 第四巻』月報「思い出すこと」の「六 仏訳された小説」に「昭和三十二年にはフランスのアカデミーから、『巴里に死す』と『サムライの末裔』の作者として、『友好大賞』を受けるとともに、スウェーデンのアカデミーから、ノーベル文学賞の候補に推されました。」と書いています。

『一つの世界—サムライの末裔』は、全十三章で構成されています。昭和20年8月15日の天皇の終戦玉音放送から始まります。太郎の父は海軍中将阿部重助で、母は園子です。その副官徳田少佐夫人かく子は「戦争が終った」と園子の前でむせび泣き、「平和になった」と喜びます。枢密顧問官の祖父は東京大空襲で爆死し、祖母は「サムライとして育てた」ので息子は帰還しても自刃すると嫁園子に告げます。阿部家の人々はサムライの末裔です。園子は逗子の家の空き室を、かく子の紹介でアメリカの将校サドク少佐に、中学生の次男武雄の賛成もあり、貸すことになります。やがて

サドク少佐と娘扶美子は交際するようになり、求婚されます。

東大の医学生阿部太郎と広島の女学生小野光子の恋愛が、原爆の投下で吹き飛びます。 太郎は小学校四年生から中学四年まで広島で暮らし、中学一年生で幟町のカトリック教会で深尾神父の洗礼を受けます。信者の小野家から歓迎され、令嬢の光子に愛を寄せます。岡山の六高に学び、神経衰弱の親友吉田清人を広島の家へ送って行き、8月6日に教会で光子に会う約束をします。その日の朝、ピカドン注この仏訳で「ピカドン」がフランス語として使われたが広島に投下され大惨事になったのです。「空には恐ろしいように巨大な黒雲の花キヤベツがひらいていた」。「黒い雨」が降りだします。

太郎は教会で待っている光子のことを思い市内に駆けだし、探し回ります。被爆した怪我人や死体の悲惨を目撃します。その惨状を「街道にはもう市内からなだれて来る怪我人がいっぱいだった。頭から血をかぶっている者、腕をだらり下げた者、杖にすがって来る者、肩にかかってくる者、赤ん坊を抱えた女……みな血にそまって、男も女も歩いて来るといふより、ひよるひよる何かに操られ黙々と歩いている様子。殆どみな着物を着ていないで、ぼろをさげている。見れば、そのぼろきれば皮膚が灰色にたれさがっているのだ。肩から、腕から、背中から、皮膚のぼろがさがっている。髪の毛のない者、眉毛のない者、真裸で黄色にふくれた者。誰一人うめき声一つたてず。黙々と市内へなだれている。まだ大火をくぐった筈はないのに全身焼けている。辺りが真空になったように音声がない。」など、何度も悲惨を描写しています。深尾神父と光子を探し回ったが見つかりませんでした。赤十字病院で院長のS博士に会い、**原子爆弾であろうと聞きます。**

博士の助手となって尽力し、8月15日に天皇の降伏宣言放送を聞きました。光子を見つけられずに東京の家に帰ります。翌年8月6日の原爆記念日に、光子を探しに広島に出掛けましたが、光子には再会できませんでした。

小野光子は、家は崩壊しましたが、左腕の傷だけで生き延びました。手伝いのくらすさんと、両親と太郎を探しました。父は市役所で殉死、母は福屋で焼死。原爆の惨状を見て絶望し、太郎は、あの閃光で焼死したものと諦めました。母が借りていたA村の農家の離れに疎開して、くらすと共同生活。父の弟の伯母の家に寄寓、従妹春子の家で米兵ヘンリーにレイプされ、叔母の家には帰らずに電車に乗って上京します。この電車に大坂から乗車

したジョリに出会い、原爆で孤児となり東京の太郎を訪ねると告白。同情したジョリと一緒に青山に行ったが、空襲で廃墟となっていました。ジョリの家に寄宿し、「従妹のリリー」として占領軍の倶楽部で働くことになりました。一年後に、**太郎の祖母が夫の墓前で自決した新聞記事で太郎が生きていたことを知ります。**ジョリに急ぎ立てられて、逗子の阿部邸の葬儀に出掛けるも、花束に小野とだけ書いて届けてもらい、太郎に会いませんでした。酒に溺れます。光子はB大尉と交際し、妊娠して喜びますが、生まれたのは黒人の軍曹ヨハヒムに凌辱された結果の黒い赤ちゃんでした。太郎との関係が出来て、太郎は親身に世話をしようとしたのに、光子は老婆に頼んで沢野夫人の混血児の家へ捨ててしまいます。光子は大和の天理教本部にくらすを訪ねます。素朴な信仰と親切に慰められ、信者の神戸の親類の女中となり、太郎に住所の無い便りを送ります。太郎は、アメリカ軍の白人に撃たれた黒人を助け、人種差別を無くすために「人類が色から解放されることで世界が一つになる」生化学の研究を始めるために名古屋に移ります。扶美子はコロンビア大学に留学し、サドクさんと結婚することになります。吉田清人が原爆症で危篤となり、太郎は東大病院に見舞い、母の世田谷の家へ帰って来たところで小説は終了します。太郎と光子が今後どうなるかは書かれていません。再会して結婚するかも知れません。光子が腕の怪我から原爆症で死去するかも知れません。太郎の「一つの世界」のための研究は空想的で不明ですが、色を超えるのは国際結婚が最良の道でしょう。扶美子は白人と結婚し、光子は黒人の子を産んだのです…。

原爆小説として井伏鱒二の『黒い雨』が知られています。これは、昭和40年1月から雑誌『新潮』に連載され、昭和41年10月に新潮社から出版されたのですが、『黒い雨』や『ピカドン』等は、『一つの世界』に既に書かれていたのです。原爆小説としては『一つの世界』の方が先で優れていると思われずから、もっと読まれ評価されねばならないと思います。

この(令和3年)1月22日に核兵器禁止条約が発効されました。広島・長崎で原子爆弾の大惨事を体験した日本こそが、この条約を批准し全世界に核兵器の廃絶を訴えなければならぬと、私は思います。

『一つの世界―サムライの末裔』は芥沢文学の代表作の一つです。この機会に精読し、原爆の悲惨さを再確認すべきです。 [令和3(2021)年1月識]

信仰小説『懺悔紀』——つつましく信仰に生涯をささげた両親に献ず——

芹沢光治良が、戦中の最後に書いた長編小説は『懺悔紀』です。『芹澤光治良作品集』の第三巻に収録されましたが、その月報「思い出すこと(五)」（昭和49年6月新潮社発行）には、「この巻は宗教に関する作品を集めたようになっていますが、作者である私は、この三篇の長篇小説を、宗教をテーマに創作したわけではありません。／＼第一、私はどんな宗教にも帰依していません。」と書いています。また「私が天理教徒だと考える人があるようですが、決して天理教の信者ではありません。」「従って、私が死んだ時には、無宗教の葬式をすればいいからと、家人に話しています。」と明記しています。両親が天理教に帰依して、全財産を寄進し、布教師として献身したために、祖父母の元に残して家を出て行ったのを、親に捨てられたと思ひ込みます。しかし、信仰深い祖母や叔母に育てられ、幼少には天理教の教えの中で成長します。中学や高校の青年期に、天理教から脱皮しましたが、パリに留学して、キリスト教にふれ、結核闘病の中で「大自然の神」を悟ります。作家になって、「両親が一生をかけた物を識ろうとして、苦勞も」しました。両親の信仰が「聖フランシスのように純一で清浄であった」として、昭和16年10月に、短編小説「秘蹟母の肖像」（注／「秘蹟」は、後には教育漢字の「秘蹟」となる）を書きます。その発展として、天理教の信仰に生きた岩尾一良という「芹沢光治良の分身」としての二歳下の主人公を虚構して創作したのが長編小説『懺悔紀』です。戦局が厳しくなり作品を発表出来なくなっていた昭和18年に、養徳社の岡島藤人善次社長から、週刊新聞へ天理時報に「連載小説を書いて欲しい」と依頼され、「最後の長篇小説を書き遺すつもりで」、5月から翌年にかけて約1年間連載したのです。

『文学者の運命』（昭和48年6月10日主婦の友社発行）には、この経過が「発表することが難しくなってきたから、私は長篇小説『懺悔紀』を書いて、原稿を養徳社の岡島社長に託した。養徳社は京都に本社があったが、いざとなれば奈良県の天理市に移るといふことであつたから、その金庫に原稿の保管をたのんだのだつた。／＼岡島社長は同時に天理時報の社長も兼ねていた

が、軍に協力する宗教には紙の配給も窮屈でなかつたのか、金庫に納めておいて永久に発表できないでしまう惧れがあるからとて、四頁の週刊新聞に毎号四段抜きに発表した。そして天理時報が発行できる間は連載をつづけるからと、手紙をくれたが、最後まで発表ができた。」と書かれていて大部違つています。『懺悔紀』を書き下ろして、養徳社の岡島社長に出版を依頼して、その原稿を送つたのが、金庫に保管するより天理時報に可能な限り掲載しようということになり、全部発表出来たようです。そして、戦後の昭和21年9月20日に単行本で『懺悔紀』が出版されました。

この長編小説の題は、『芹沢光治良自選作品集 2』（昭和32年6月5日宝文館発行）では、『さんげ紀 生きんとして』となり、『懺悔紀』や『さんげ紀』と書いているものもありますが、最終的には『懺悔紀』となり、「つつましく信仰に生涯をささげた両親に献ず」の献辞が付けられました。序章があり、第一章から第五章で、終章と全七章で書かれています。自選作品集の「あとがき」には、「キリストを識ろうとして、その伝記や福音書を精読したのも、その頃であるが、何かを書かないではいられなくて、発表するあてもなく、この小説を書いたのもその頃からである。」「そんな不安の朝夕に、私はこの作品をゆつくり書くことで心を落ちつけていた。そんな訳で、この作品は自分のために書いたのかも知れない。しかし、書き上げたあとで、これを尊敬する岡島善次氏に託して、戦争がおわって万一再び出版できる日があつたらと依頼した。岡島氏は地方に住んでいて、京都で良心的な出版社、青磁社の社長をしていたから、戦争中に死ぬようなことがあつても、この作品は岡島さんの手で、生きのこるよう期待したからだ。」と書かれています。また、「その点、この作品は、私には最も思い出の多い作品であるが、また最も私のかげの宿つた作品である。自選集を出すとしたらば、第一に選ばなければならぬ。批評家の目に一回も触れたことのない作品だが、私の読者には必ず愛せられる作品であらうと、私は信じている。」と愛着のある作品で、読者には愛読されるものであると自己評価しています。この本の遠藤周作の「解説」には、「読みながら私は段々、引きずりこまれていった。引きずりこまれると言うよりは作者の烈し気魄が文章を裏うちして、その気魄がビーンと胸に伝わってくる。おそらくこの作品は発表できるか、できないか全く予想できなかったあの戦争の末期、氏が書か

ずにはいられない気持ちで筆をとられたのではないかと思う。その書かずにいられない気持ちが烈しく気魄となつて文章ににじみでているのだ。言いかえるならば、この作品は当時の氏にとつて総決算のような意味をもつていたのではないかと思う。自分の人生、宗教、芸術観をすべて顧みつつ筆を進められたのではないかと思う。したがつてこの作品は芹沢氏の全作品の圧縮であり、氏を語る上にも欠くべからざるものであろう。」と書いて、気魄のある文章であり、芹沢文学の総決算のような意味がある作品であろうと高く評価しています。また、「この作品で氏が対決している問題の一つは言うまでもなく、天理教を通しての宗教との対決である。おそらく作者の分身であると思われる主人公岩尾がその人生で闘つたものは愛と信仰の問題——言いかえれば愛と死である。愛の場合とおなじく、宗教の場合もその代償を求めぬ信仰の決意と無償性がここでは強調される。」と書き、岩尾の信仰世界がカトリック的であるとも説き「芹沢氏の作品の中で屢々、カトリシズムにたいする氏の興味がうかがえる」と指摘しています。

芹沢光治良と思われる「私」は、作品の「秘蹟」を発表した後、松河扶美という婦人から手紙が送られて来ました。天理教の信者ですが、お会いしてお願ひしたいことがあると書かれていましたが、返事を出さなかつたら、だしぬけに訪ねて来て、弟を助けて下さいと頼みます。弟は先生を尊敬しているので、「お道にかえる」ように説得して欲しいと言います。弟岩尾一良さんの家に案内されて、岩尾さんと小兒麻痺の青年に会います。

「神に導かれて、運命のように二人に会い」「自分で創つた小説の主人公のように、二人のことを、思いめぐらす」と序章に書かれています。第二章以後に、岩尾さんの懺悔としての告白が詳細に書かれます。岩尾さんの便り、その故郷の河南村を訪ねて、蜜柑畑の別荘で、築地静夫君は実子ではないが、その青年の家庭教師をしていることを知ります。滞在六日目に岩尾さんが詳細な告白を語り始めます。岩尾一良は、芹沢光治良の分身ですが、一良の名で長男ですから、実兄の一郎の立場で、いなかつた長姉扶美を虚構しています。父岩尾良平と母は、芹沢氏の両親をモデルにしています。叔父純平は長吉と三吉の融合、弟平吉は亀太郎に当ります。父良平は実父のままですが、母は「どこか楽天的で優れた母」「忍耐強く、よい母」として虚構されています。実母への芹沢氏の感情とは違ひます。

岩尾一良は、一高の二年後輩と設定されていますが、多く芹沢光治良の生涯と重なります。岩尾一良の親友塚本友明と妹勝子はスペイン風邪で去します。愛していた森節子は銀行家の築地と結婚し、その子静夫は小兒麻痺となり、離婚します。一良は、菊岡と高文の受験勉強をし、商工省に入り、ジュネーブの国際労働会議に同行しました。資本家代表のOさんに滞在費を出してもらいパリに残ります。作家を目指し、アッシジの聖フランシスを訪ねます。帰国して書いた作品は評価されず、Oさんに従つて実業界に生きます。節子さんが死去すると、より子と妥協的に結婚し、一女が生まれますが七歳で早世。築地静夫君の家庭教師となり、我が子として育成します。戦局は悪化し、青年や学生も徴用され多く戦死します。静夫君は不具でお国にも岩尾さんも重荷で、生きておれないと自殺を決意します。説得しましたが、不動岩から身を投げて自殺してしまひます。

『懺悔紀』の「懺悔」は、岩尾さんの天理教や静夫君への懺悔であり、戦争で多くの若者達を犠牲にし、身体障害者も生きられない時代への作家の懺悔でもあつたと思います。戦中に反戦小説として著作したのです。

戦後の昭和37年の『わが小説』(朝日新聞芸芸部編 雪華社発行)に、『さんげ記』を自選し、「作者である私が、愛着をもつ作品が、必ずしも正当に評価されなかつた」とし、「今後、私の小説は、この作品から出発しなければならぬ」と書いています。芹沢文学では、重要な代表作と言えます。

また、『文学者の運命』に『巴里に死す』も、『愛と死の書』も『懺悔紀』も——これが私が敗戦前に書いた代表的な長編小説であるが、みな『孤絶』と『離愁』から生まれた作品であつた。そして、みな闘病しながら、私の神に向かつて書いたようなものである。」とも書かれています。『懺悔紀』も自伝的な三部作『孤絶』『離愁』と『故国』の発展として書かれたのですが、昭和14年7月から翌年の4月までに連載された自伝的な小説『男の生涯』その後の短編小説『秘蹟—母の肖像』の発展として、天理教関係の作品として長編小説『懺悔紀』が創作されたのです。傑作と言えます。

芹沢文学における『懺悔紀』の評価は、まだまだ足りないと思います。信仰小説『懺悔紀』として正しく高く評価し、愛読されねばならないと思います。『懺悔紀』を書いたことで、戦後に『教祖様』を労作し、最後に『死の扉の前で』を書くことが出来たと思われまふ。〔昭和2(1927)年10月識〕

名作『巴里に死す』 日本文学史の名作の一つとして評価

芹沢光治良は、96歳の生涯に、膨大な長編小説を創作しました。大河小説『人間の運命』（全16巻）は、芹沢文学の集大成であり別格として、個々の長編小説で芹沢文学の代表作と言えるものは何点もあります。その中で、最も多くの人々に愛読された第一の長編小説は『巴里に死す』です。

『巴里に死す』は戦前、正しくは戦中の長編小説です。昭和16年12月8日に真珠湾攻撃をして、戦局は太平洋戦争に突入しました。検閲が厳しくなり、印刷紙の不足から、作家の創作が困難になっていました。この年の秋に、雑誌『婦人公論』の湯川編集長から、来年の1月から二年間の連載小説を書くことを求められました。昭和15年の7月から翌年の4月までに自伝小説『男の生涯』を雑誌『新女苑』に連載しました。パリに留学し、結核に倒れ、フランスやスイスの高原療養所で闘病生活をし、結核を克服して、学者を諦め作家への道を模索した日々を自伝的な作品として記録しようとして、『孤絶』を同人誌『文學界』に、この年の10月から連載するために諸資料を集め構想していました。『ころの広場』（新潮社）に収録された「ある創作の秘密」に「現在は生命を軽んずる時代で、前線に征く者も死を急ぐようだが、銃後をまもる者も生きることを考えないが、私は小説のテーマとして、生命がどんなに貴く大切か、死を急ぐな、と考えさせるような主題を選びたい」と湯川氏に話したら、「湯川氏はすべて私に委せると言って帰った。さて何を書くかと考えた時、その少し前まで『文學界』に連載した小説『孤絶』も影響したのでだろうが、スイスの雪の高原で毎日のように宙に浮かんで、さまざまなきことを無言で語っては消えた幻の女、伸子が私の胸に見えた。そうだ、この女を主人公に選べばいいのだと、私は膝を叩く思いがした。そして、一年間、この幻の女と対話をするようにして、毎月『巴里に死す』を書きつづけたのだった。』『巴里に死す』の発表は、戦時中であり、特に戦局があやしくなった時でもあり、戦力増強に資しない作品として、当局からいつ連載禁止を命ぜられるか、はらはらしたが、とにかく一字の伏せ字もなく、連載を終って、この時局に奇蹟だと噂された。」と書

いているように、戦争で犠牲になる若者たちを憂慮して、もしも女性（母親）が結核を患ったとしたらどうであったかと、主人公の伸子を、妻の境遇にして創作しようです。「思い出すこと」の「五 宗教をテーマの作品だというけれど」に『孤絶』を書いている間に、結核を患っている「私」が男性でも夫でもなくて、女性であり、妻であったらどうだろうか、幾度も反省したものです。それは、スイスの高原で、宙に描いて消えた幻の伸子との対話が無意識裡に、よみがえったからにちがいありません。それ故、『婦人公論』に連載小説を頼まれると、直ちに妻が結核患者である『巴里に死す』を書くことができたのでした。従って『孤絶』と『巴里に死す』とは、表裏一体をなす作品です。」と書いていることから知られます。「三 パリで死んだ二人の主人公」にも『巴里に死す』は昭和十七年一年間『婦人公論』に、美しい猪熊弦一郎氏の挿絵で連載しました。戦争中、人間の生命が軽んじられ、若い人々が死を急ぐような時になって、憤りと悲しみから、生命は尊く死を急ぐなと、絶叫したいようなのを耐えて、このつましい小説を一年間書きつづけて、軍からどんな迫害を受けるか自ら験したような作品です。」と回想しています。湯川編集長の苦労や尽力で連載が中止されませんでした。湯川編集長は心召され沖繩で戦死しました。また、『巴里に死す』は『孤絶』を書いて、その裏付けがあったから出来た作品です」とも書いています。

戦時中で、『巴里に死す』には批評や評価はありませんでしたが、多くの愛読者に受け入れられました。「ある創作の秘密」に「その上、単行本として六千部の用紙の割当て許可があつて、十八年春中央公論社から出版したが、旬日で売り切れて、定価の三倍から五倍で売買されたと聞いた。戦後、各社が競って出版して、昭和二十六年までに百万部出たが、現在もなお版を重ねており、昭和二十八年にはフランスで出版されると、フランスの文学界で大歓迎を受けたばかりでなく、スイスで豪華本が出るし、ベルギーで文庫本が出て、私は無数の読者をフランスに得た。それも、幻の女、伸子という主人公が真剣に子に生きた無償のまこと、日本語の読者と同様にフランス語の読者にも感銘を与えたからのものである。」と書かれています。『巴里に死す』は、角川文庫や新潮文庫でも出版されました。昭和32年4月2日宝文館発行の『芹沢光治良自選作品集1』に収録され、昭和49

年4月15日新潮社発行の『芹沢光治良作品集 第5巻』に収録され、没後の平成8年10月10日新潮社発行の『芹沢光治良文学館 第7冊』にも収録されました。昭和22年1月15日に文潮社(名作現代文学4)から『巴里に死す』、昭和33年3月20日にダヴィット社、昭和43年2月偕成社(ジュニア版日本文学名作選46)から『パリに死す』と題し、そして平成24年2月20日に勉誠出版からも『巴里に死す』と題して単行本で出版されました。また諸社の日本文学全集にも『巴里に死す』は多く収録されました。例えば、昭和28年1月20日筑摩書房発行の『現代日本名作選』に、昭和29年11月30日角川書店発行の『昭和文学全集 49』に、昭和38年10月15日角川書店発行の『昭和文学全集 13』に、昭和43年1月12日(昭和49年4月8日)集英社発行の『日本文学全集 61』に、昭和54年3月25日筑摩書房発行の『筑摩現代文学大系 54』等にも収録され出版されています。ロベール・ラフォーン社からの仏訳『巴里に死す』も含めると、数百万部が出版されていると思われ、大ベストセラー(ロングセラー)と言えます。

芹沢光治良は、『巴里に死す』が仏訳された時に、これまでの作に手を入れて、昭和33年3月20日にダヴィット社から『パリに死す』と改題して出版しました。これは昭和43年2月に偕成社から刊行された『ジュニア版日本文学名作選 46』でも、子供が読むために、『パリに死す』と題しました。しかし、昭和48年6月10日に主婦の友社発行の『文学者の運命』には、『愛と死の書』や『パリに死す』や『懺悔記』等、作品のできはともあれ、文章としては、私の文章ができあがったばかりで、まだマンネリズムに陥らなかつたから、新鮮で自分でも満足できた。」と書き、『巴里に死す』も、『愛と死の書』も『懺悔記』も——これが私が敗戦前に書いた代表的な長編小説であるが、みな『孤絶』と『離愁』から生まれた作品であった。」とも書いています。昭和49年4月15日新潮社発行の『芹沢光治良作品集 第5巻』では、『巴里に死す』として、これが正式の題名と自覚していたようです。『懺悔記』も『懺悔紀』と最終決定しています。

また、多くの評論家や学者が『巴里に死す』の解説や批評を書いています。しかし、なぜか本格的な評論が書かれていないのです。それで、私は筆名の林寛仁とし、「名作『巴里に死す』論」芹沢光治良作・娘へ遺す母伸子の『愛の手記』を書き、『近代文学の多様性』(井上謙編 平成10年12月12日翰

林書房発行)に寄稿しました。ところが、誰が指示したのか、題名の「名作」が筆者に何の断わりも無く除かれました。本文で川端康成の名作『雪国』と対比して、『巴里に死す』を戦前の日本文学の名作として評価すべきであると主張したので、題名から「名作」が除かれたものと思います。しかし、この評論の主題が、『巴里に死す』を日本文学の代表作とするだけで無く、日本文学史において名作の一つとして評価すべきであると主張するものだったから残念に思いました。この評価は、今も変わりません。今後も『巴里に死す』を名作であると評価して行きたいと思っています。この論文は、平成24年6月10日に手作りの小冊子として刊行しましたが、題名に堂々と「名作」を入れていません。私の『巴里に死す』論は、これに尽くされていますので、この論文をお読みいただきたいと思っています……。

しかし、『巴里に死す』の作品の内容を最小限で紹介します。結核に罹った妊婦の宮村伸子が、我が子惣を自然分娩し、スイスの高原療養所で闘病しながら回想を記録した三冊のノートとして虚構された手記です。エストニエ氏への献辞「かかる創作より他にお互いに心を通はす術のなくなった世界の不幸を歎いて」(後に改題があり、生命の大切さを説いて戦争の不幸を間接的に批判しています。パリ留学以来交流のある作家Sは、医師宮村博士から妻伸子の遺した手記を結婚した娘万里子に手渡すべきか相談された経過が序章と終章に書かれています。全五章に三冊の手記が収録されているのです。我儘にまた不幸な境遇に育った伸子は、夫の失恋した鞠子に嫉妬します。妊娠してからは自己変革して行きますが、娘への母性愛から、闘病の途中でパリに戻ってしまい、結核の悪化で命を喪います。その最期には精神的に昂揚してカトリックのアガペー神への最高愛に帰依します。鞠子から万里子と命名された娘は、この「死をも超えた、娘への母の無償の愛」の手記を読み、長文の手紙を作家Sに寄せます。既に立派な新しい女性として成長している万里子は「ポーヴル・ママン(おいたわしいお母さま)」と思い、鞠子さんのような女性になりたいと書いて来ました。手記も手紙もすべては虚構で、私小説でない、創作としての見事な本格小説と言えます。文体も明快で論理的です。日本文学を超えた傑作として評価されました。『巴里に死す』に対比される作品として、『巴里夫人(マダムアイダ)』や『狭き門より』等も創作されています。 [令和2(2020)年7月] 謙